

10代の母という 生き方 ⑤

大川 聡子

★まえがき

前号（マガジン14号）から若年母親へのインタビューを基に、若年母親が出産を主体的に選択していく過程と、その背景にある社会的特徴について分析しています。対象者の概要、研究の背景につきましては前号をご参照ください。今号では、出産後の母親たちがどのような状況におかれていたかを中心に、若年母親のインタビューを分析していきます。

2. 生きづらさの自覚

(1) 【社会的不利の顕在化】

① 《困難な生活実態》

〈経済的困難〉

出産後、妻は仕事を辞め専業主婦となったため、夫の収入で家計を捻出しています。夫も就労につながる資格を持っていないこともあり、収入は高くはありません。貯金ができないために父親は資格取得ができず、母親は乳幼児を抱えて働くこともできず、貯金ができないという悪循環に陥っています。

Bさんの夫は荷物運搬業に従事していますが、自動車運転免許がないために運転手になれず、収入が少ない状況にありました。運転免許を取得することも金銭的に難しく、生後2ヵ月の子どもを抱え、Bさん自身が働くことも難しい状況にあります。Bさんは必要な支援として、金銭的支援と保育サービスを希望していました。

Bさん (必要な支援は)お金の補助ですかね。主人も車の免許もってないんで、だから収入も11万くらいしか。月11万でやりくりしてるんでね。この子産まれたから、余計にちょっとお金かかるし、ちょっとねえ。まあ児童手当入ってくるんでね、5000(円)は入ってくるんですけど、そんなんしとったら、貯金もできないしね、車の免許も取る、取ろうとしても取れないしね、貯めれないんでね。だから、私も働きたいんですけど、この子まだ早いじゃないですか、保育園とか入れるの。だから、ねえ。お金の補助と、あと(子ども)みてくれるっていうのがねえ、あったらちょっと助かるかなあっていう感じですかね。

〈住環境の不備〉

経済的な問題から、住居面においても4階に住んでいてエレベーターがなかったり、風呂が屋内にないなど、子育てをしていく上では困難な構造の家に住んでいる人もいました。また子どもができたため、これまでの住居から引っ越しをせざるを得なくなった人もいます。

〈選べない仕事〉

夫は、ほとんどが出産後も出産前と同じ仕事をしていました。妻も経済的な理由から仕事をしようとするのですが、乳幼児がいることで、アルバイトさえもままならない状況です。現在仕事をしている人の内訳は、アルコール販売を主とした飲食店の接客業、家業手伝い、保険外交員です。現在は保育所等の空きがないため仕事はできないが、いずれしたいと答えた人も多くいました。

Kさんは、乳幼児を抱える母親は、病気の際の急な欠勤が危惧されるため、アルバイトでも採用されることは少ないと言います。家計に貢献したいと働きたい意欲はあるのに、採用されないことに対して不満を持っていました。

Kさん 子どもがいるおかげでバイトできひんかったりするの、ムカつく。(子どもが)まだちっさいし、とかいって言うて。断られるし(略)。バイトもないよなあ。めっちゃ落ちた、面接。

Hさん 私もめっちゃ落ちた。

妊娠する前に持っていたデザイナーや美容師になりたいなどの夢は、今でもなりたいと思っている人もいれば、もう無理だろうと考えている人もいました。仕事については生活を支えるためのものと割り切って考えている人が多かったです。

Eさんは、妊娠前に美容室に勤めていて、スタイリストにあこがれていましたが、美容学校を出ていないため難しいと考えていました。子どもが大きくなってからも、自分の興味の近い仕事というよりは、「パチンコ屋」等、Eさん自身が考える、採用される可能性が高

い仕事に就きたいと考えています。

Eさん 美容学っていうか、スタイリストっていうのには(なりたかった)。美容室1回1年間くらい勤めとって、ヘアメイクさんになりたいと。人のお化粧したり、髪の毛やったりするのはやりたいなっていうのはあった。で、子ども産まれたとき学校も出てないから、今からはちょっと無理かなって思うけど、もし学校出てたら、子ども産んどっても子どもがある程度大きくなったら美容師さんやってたかなあと。

筆者 今後、お仕事されるんだったら美容師さんとか、コーディネート系に近い所に行こうかなと思います？

Eさん うーん。この子が大きくなって仕事するとしても、パチンコ屋とか。

(1)【若年母親特有の生きづらさ】

①《後悔》

〈若者らしい生活ができない〉

若くして結婚したゆえに、もう恋愛できなくなってしまった、と残念に思う声も聞かれました。また、他の友人は親に保護され自由にふるまえる年齢であるのに、自分は家族に縛られ、遊べないことを淋しく思う声もありました。それでも遊びたいという気持ちを抑えて、母親たちは日々育児をしています。

Fさん (F)なんかまだ周りに友達おらんけ、あれだと思わんけど、ちょっとなんかやっぱ自由になりたいなっていうのは。(F)はもうダンナとかおるけど、なんかもっと？家庭じゃなくて外で、遊びたかったなとかって思う。

②《子育てへのプレッシャー》

〈子どもとの関わり方がわからない〉

家族から虐待を受けた、または親と十分に関われなかった人は、自分のような思いを子どもにはさせまい、と親とは違った方法で育児を行うよう努力しています。その反面、自分がそのような育児方法で育ち、母親として適切な関わり方が分からないため、自分もいつかそうした思いを子どもにさせるのではないかという危機感も併せ持っていました。

Eさん この子産む時に、正直うちは小さい時にけっこうお母さんに殴られたりとかして育てるから、もしかして自分も殴るんちゃうかなって不安はすごいあったけど、でも、今のところそんなんは、叩いたりとかいっても手とか足とか。もういい加減にしいやって言って、あんまりにも聞かへん時とか、危ないもんさわったりとかした時は叩くけど、それ以外で別に、こんなちっちゃい赤ちゃんに言ったってわからんやろ、みた

いな。

〈世代間連鎖からの離脱〉

若年母親達は、母親として子どもに様々な期待をしており、「いい子に育てて欲しい」、「子どもは早く産ませない」と言い、若年出産の世代間連鎖から離脱させたいと考えている母親が多くみられました。

Eさんは、父母が離婚し父方に引き取られました。その後父親が再婚し、継母と父と生活することとなりますが、継母による身体的虐待を受けます。継母により母子手帳や幼少時の写真も捨てられたことから、自分の子どもにはそのような思いをさせたくない、妊娠中の様子をノートに記録し、その時の思いも詳細に記載しています。その記録を、子どもが妊娠した時に見せてあげたいと語っていました。

Eさん (子ども)が子ども妊娠した時、見せてあげようと思って。うちね、育てのお母さんが産みのお母さんからもらった母子手帳、うちのやつ、破って捨てたんですよ、怒って。だから、うちが妊娠した時、母子手帳自分のやつ見たかったのに、見られへんかったのがすごいイヤやったから、で、うちのちっちゃい時の写真もないんですよ。お母さんと写ってるやつ全部捨てたから。ないから、そんなんがすごいイヤやから。

Gさんは、月々の保育料以上の金額を子ども向け英会話教室に費やしており、3歳の子どもが英語を話す姿を見るのがとても楽しいと言います。Gさんは、Gさんと夫の修学年数が短いことにより、子どもが「やっぱり」頭が悪いと他人から思われる事を恐れ、子どもの教育に大変熱意を持っていました。また、若年出産しても子どもに不自由な生活をさせるために、大学に行かせるまで仕事を続けるという決意も語っていました。

同席者 子どもを、英語とか習わせようとか、そんな思うのはやっぱり、自分のちっちゃい時の経験とかも関係あるか？あんまりそんなの関係ないか？

Gさん あのなあ、あたし高卒出やん、夫、高中退やん、中卒やん。
だからな、その子どもを、もうそういう、頭悪かったりとかしてたら、やっぱりこの子らの子どもやなあって思われるのがイヤやねん。だから、頭良くさせて、しようかなーって。

③ 《周囲との軋轢》

〈若年母親同士の反発〉

若年母親の中でもその背景は様々であり、置かれている環境も違うことから、同世代というのみで誰とでも親しい交流をもつのではなく、自分と違う点を見つけて反発し合うこともあります。

筆者 同じような年の人が集まったらまだ？

Fさん いけるけどー、そういうところ行ってもね、言ったら悪いけんね、なんか、バカそうな子が多いけんね。なんか、けっこう。じゃけ、ちょっとなかなか合う子おらんなんて思ってるね。

また、同世代でも育児を親任せにしている母親に対しては、非難する声が多く聞かれました。さらに、自分自身よりも年下で妊娠した女性に対しては非常に興味を持つのですが、「絶対無理、分かってないなー」、「いかにも遊んでるって感じ」など、否定的な発言も聞かれました。

〈年長の母親集団からの孤立〉

多くの方が述べていたのが、年長の母親集団からの孤立でした。若年母親達は、初めは母親同士の仲間づくりを考え、保健センター等で行われている様々な教室に参加していますが、参加者のほとんどは年上で、他の参加者から話しかけられることはなかったと言います。

Eさん マタニティスクールってあるじゃないですか、産む前の。あれに行ったんですけど、年齢がすごい高いんですよ。市役所とかそういうので18ってうちしかおらんくて。周りみんな26とかそんなんばかりやって。仲良くなって言うか、話しかけてもけえへんし、話しかけづらいし、って感じ。

Dさんも、年上の母親達の中で、その輪の中に入っていくことを「気まずい」と感じ、母親学級に行っても、講義を聴くことなく途中退席したことが何度かあったと言います。Dさんは、年上の母親達は若い母親に対して「抵抗」を持っていると感じていました。

Dさん 保健センターでお腹でかい時、母子教室行ったけど、全然仲良くなられへんかって、途中で帰った。気まずいから。

筆者 どののですか？

Dさん 料理とか。妊娠中の料理。あん時とか行ったけど、全然私知らん人で、みんな何回か来てはるから、友達で固まって喋ってはってんけど、私だけ気まずかったから、授業も聞かずに「帰ります」って、帰って来たことは何回かあった。

筆者 周り、友達同士で結構固まっちゃって？

Dさん なんかやっぱり、若い…見た感じ若いというのがあって、なんかちょっと抵抗があるみたいで。その人達にとって。

〈10代での出産は早くない〉

Fさんは、自分自身は19歳での出産を「若い」とは思っておらず、19歳で出産するのは「普通」のことであると認識していました。しかし15歳未満は難しいと感じており、自分自身は、夫の年齢が10歳以上離れていて、なおかつ夫がカバーしてくれるから関係が続けることができていると認識していました。

Fさん いや、若いって自分で思わないですもん。19だし。19っていったらけっこう普通でしょ？19っていったらもう普通じゃけん、若いお母さんって自分で思わないですもん。

〈アウトサイダーであるという自己認識〉

若年母親は、マスコミなどに作られた若年母親像に反発しながらも、自分達は他の母親とは違う存在である、という思いを持っているということが言葉の端々から感じられました。他の若年母親の家族構成を聞く時に「片親ですか？」と聞いたり、学校に行かなくなったことを「できちゃった結婚の一番代表的なパターン」と言ったり、「うちらだって、ふつうに育ててる人達だって」と同世代の母親とそれ以外の母親を区別し、自らは「普通の母親」ではないといった自己認識を持っていました。

④ 《問題視される若年母親》

〈児童虐待問題と関連付けられる〉

若年で出産したことに対し、周囲は母親に対して憶測も含めた意見を述べる場合があります。例えば、「子どもが子どもを産んだ」や、子どもが熱を出して仕事を休んだ時に、「これだから若いお母さんはあかんねや」と言われたり、「XXちゃん(本人)にはおもちやみたいなもんやなあ」、「おままごとちやうぞ」、「絶対無理や」等周囲から言われています。こうしたこともあって、若年出産と児童虐待を絡めて自発的に発言するなど、作られた若年母親像に対して、母親達は強く反発しています。

Jさん なんか死なせちゃった？とか言う事件出てきてるけどー、それもたまたま、その人10代だったとか、20代だったって言うだけで、それで結構みんな若い人は、じゃあそういうことするんじゃないかとか思われるから。うちらだって、普通に育ててる人達だって、そんなの見れば、何て言うんだろう、あー、何で殺しちゃったんだろうとか、思うのみんな同じだし、知ってる人だって考え方みんな同じだから、決めつけないで欲しいなっていうの思うし。

〈トラブルが若年母親特有の問題とみなされる〉

Kさんは子どもの急な発熱で欠勤した時に、若い母親だから子どもの管理ができていないと言われたそうです。子どもの急な発熱など、やむを得ない理由で欠勤せざるを得ないことはどの母親にでも起こりうるのですが、若年母親の場合、若い故に「自己管理ができていない」とされ、批判の対象となってしまいます。

Kさん 仕事やったら、子どもが熱出て、急に休みますとか言ったら、なんか、それでもやっぱ、子どもいはらへん人ってわからないじゃないですか、そういうのが、だから、いつもの自己管理ができてへんからって、やっぱりそれで、若いお母さんはそれやし、あかんねやみみたいな言われた時はむかついた。

〈妊娠したから結婚したとみなされる〉

Fさんは、夫は結婚しようと言っていたのですが、本人にもともと結婚する気はなく、出産をきっかけに結婚することになりました。Fさんは、別に結婚しなくても相手と一緒にならばそれで良かった、と述べています。

Fさん できちゃった結婚とかって言われるのやだなー、なんか。そうなんじゃけどー、別に、Fはねー、結婚はせんでいいって思ってて、なんか、そうじゃないですか、結婚って紙でしよただの。でもし、けんかして別れたら、離婚って言うのがつくでしょ、別に結婚せんでも、もう一度結婚したいって、一緒におったらそれで良くないですか？

第3項 行き渡らない支援

(1)【受けられる支援に生じる個人差】

① 《インフォーマルサポートの有無》

〈子どもに関わる父親、関われない父親〉

夫の多くが育児に協力的でした。夫の育児分担は、子どもの入浴、保育園の送迎、休日の育児などです。夫が育児に協力しやすい背景としては、交代勤務、日勤中に休憩がある、休日は出勤する必要がないなど、職場の環境要因も大きいようです。子どもと3人の暮らしには、夫婦2人とは違った楽しみがあると答え、妻以上に出産を喜んでいる父親もいました。母親達は父親であり一家の中心となり支えている夫に対し、感謝の思いを持っていました。

Jさん ダンナはもう、影で頑張ってくださいって感じ。ほんとによくやってくれると思ってから。そんな口に出しては言わないけど。言えないけど恥ずかしくて。でもほんとに頑張ってくれてると思う。ダンナも、よく面倒見てくれるし、不満はない。

原家族において親像を築けず育児を不安に思っていたのは、母親だけでなく父親である夫も同様です。Eさんの夫は、原家族における父親不在から、義家族との関係構築に困難な面がみられました。しかし、育児は積極的に取り組もうと努力している様子がうかがえます。

Eさん ダンナさん自身は正直、父親って言うのんがね、高校生くらいからおらんくなったら、そっからの父親との付き合いが分からんから、うちのお父さんに会った時はすごい戸惑って、なんて接したらいいの分からへんみたい。だから、甘え方も分からんって感じや。だから、もっと甘えていいんやでって言ったら、その甘えるの意味が分からんくて、言うたら利用するみたいな感じに考えたりとか。ややこしかった。こんなんで親になれるのかなって、自分自身そういう不安はあったみたい。それが子どもなんか育てられるのかなあみたい。でもすごい、かわいがってくれてる。

しかし、育児に協力的な夫ばかりではありません。Kさんの夫は、Kさんに対し殴る蹴るの暴力がひどく、夫婦喧嘩で家に穴が多数空いていたと言います。Kさん自身も尾てい骨を骨折し、救急車で病院に運ばれたことがあります。あまりの暴力のひどさに警察に通報し、夫が拘置所に収容されたこともあったそうです。Kさんは夫のこうした暴力を、一緒に生活することで治したいという思いを持っていたのですが、親の強い勧めにより離婚することになりました。Kさんの夫は家にいることはほとんどなく、同居中に子どもをみることはなかったと言います。

Kさん 夫は(子ども)みることもなかった。

筆者 小さい時にお風呂入れてくれたりとか、そんなもない？

Kさん なーい。別れてからのほうが、(子ども)は一とか言ってきたり。

〈家族の誰かが支える育児〉

若年母親の育児には両親の役割も大きいです。出産に賛成していたか反対していたかは関係なく、経済的にも育児の面でも彼女達を援助しています。そのため妻方の実家の近くに住んでいる人が多くみられました。また両親の離婚により母親と離別している場合も、出産時は実の母親が大きく関わっています。

GさんとKさんは実家が近く、保育所の送り迎えや食事の支度などの支援を頻繁に受けています。Gさんはこうした状況を「楽」とであると語っていました。

Gさん お母さんいる時はお母さんみてくれるし、弟がけっこうみてくれて、遊んでくれる

し、で、保育所の、G が送り迎えとか行けへん時で、ダンナも行けへん時は、おばあちゃんとかも行ってくれるし、なんかみんな、みてくれて、楽。ご飯、夜ご飯つくるのめんどかったら、ダンナが子ども連れて、自分の実家行って、ご飯食べに行ってくれるし、私むっちゃ楽。

Eさんは、両親が離婚したため実母と離れて生活していましたが、出産後は、実の親が生活用品や育児用品を買ってくれるなどの支援をしてくれたそうです。

Eさん もう病院代がなくて、その病院代ないからって言うんでお父さんに何回か借りたことはあるけど。それ以外でお父さんにお金もらったりとかは一切なくて、産みのお母さんはたまに会った時に子ども用品、赤ちゃんのほ乳瓶とか。あんなんをいっぱい買ってくれたりとか、家に、引っ越して来た時に何もなかったから、コンロと、布団とーとか、そういうの買ってもらったりとか。すごい助かったみたいな感じで。

また、故郷から遠く離れ、両親とはほとんど連絡を取っていない Fさんは、父方のおばが面倒を見てくれていると言います。他にも、一度故郷に帰った時は兄がベビーカーやベビーベッドをレンタルして用意してくれていたそうです。このように、親と離別していても出産を機会に支援を提供してもらったり、親との関係が希薄な場合、親族や兄弟が支援を提供していることがあります。

〈友人の応援〉

同世代の友人も、若年母親の育児を応援しています。Bさんは既に子どもがいる友人に勇気づけられ、出産を決意しています。それ以外にも、育児の情報交換や、子どもを連れてバーベキューや海に出かけたりなど、友人達と子どもを含めた付き合いをしていました。子どもがいない友人も、彼女達の立場を応援し、妊娠中に本人を励まし、出産時に子どもの洋服などをプレゼントしています。

Dさん 一番仲いい子は、あのその、手術終わって出てきて速攻に、「生まれたでっ」で電話したらすぐ学校飛び出して、定時制の学校さぼって、お見舞いにきてくれて、ほんでベビー服プレゼントしてくれて。で、今度もう一人の友達は、なかなか接触…仲はよかったけど、遊ぶ接触がなかったけど、子ども生まれたって聞いて家に来て、退院してから家に来て、でまあ、よだれかけとベビー服とプレゼントしてくれた。

② 《社会的支援とのつながりと断絶》

〈信頼できる専門職との出会い〉

若年母親の多くは保健所・保健センターで行われる健診等は受診しており、健診時に行

われる指導も、自分の興味がある部分は聞いて守っています。また保育園で入園前の子ども達に園庭を開放し、様々な遊びを母親と一緒に言う園庭開放にも積極的に参加し、その様子で保育園入園を決意する人もいました。

妊娠、出産を通じて専門職との関わりが深い人は、出産後も専門職をととても頼りにしています。妊娠を「誰も喜んでくれなかった」という F さんは、妊娠後期になっても出産できる病院が見つからずに困っていました。そこで母子手帳を取りに行くことを思いつき、保健センターに母子手帳を取りに行きます。その時に出会った Z さんに病院を紹介してもらい、無事出産することができました。Z さんは地域の産科病院についての情報を多く持っており、この病院であれば、妊娠 8 ヶ月まで未受診だった F さんを受け入れてもらえるだろうといった目星をつけて、病院と交渉していました。

筆者 出産の時に一番いろいろやってくれた人って、

F さん (同席者 Z さんを指さす) ほんま。

Z さん 私何にもしてないよ。先生(産婦人科医)のところ連れて行っただけやがな。

F さん ほんま、F 赤ちゃんね、産むとどこも紹介してもらえんってか、断られて。(妊娠)8 ヶ月まで病院行ってなくて。4 ヶ月の時 1 回妊娠してますって行って確認してもらっただけで、あと全然行ってなくて病院。やっぱ親おらんけ、産ませてくれんから、保護者おらんとだめですって言って、その時 Z さんとこ、母子手帳とりあえず取りに行かないといけんと思って、母子手帳取りに行ったら Z さんおって、色々相談して、したら産婦人科教えてくれて、一緒に病院までついてきてくれた。で病院行って、お腹大きかったけ、女の子とかもその日に分かって、でちゃんとしてもらった。

Z さん 先生親切にしてくれたな。

F さん うん。良かった。

〈初対面では心を開けない〉

若年母親は、どんな支援でも積極的に受け入れるというわけではありません。H さんは、病院で体重を測った直後に訪問した保健師に対して訪問を拒否しており、自分にとって必要でないと考えた支援は受け入れていません。また J さんは、子どもが乳幼児健診で発達の経過観察が必要であると判断され、保健師が家庭訪問を行っています。その際に夫の暴力により開いていた壁の穴に対して、保健師は状況のみを聞いて「すぐ帰った」と語っていました。

筆者 産んだ時、保健婦さんが訪問来てくれたりとかありました？

H さん 来た、1 回だけ。私もういらんって言った、病院で(体重)測ってから来はるんやもん、いつも。

J さん 積み木何個積めるかとか、そんなんを。それがいけへんかったんかなあ。私。で、来

はった。

筆者 その時に何か相談に乗ってくれたりとか、ありましたか？

Jさん 相談できる人はいますかーとか、そんなん聞いてはって。んで、家が、家の壁すっごい穴開いてたから、どうしたんですかーとか聞かれて。でもすぐ帰らはった。なんか書いたりして。

〈保育所に預けることへの抵抗〉

8ヵ月の子どもを育てているLさんは、育児を負担に感じ「毎日しんどい」と話していました。同居の祖母が子どもをみってくれることもあるのですが、ほとんどの育児や家事はLさんが行っています。家計のやりくりが難しいことから、子どもを保育所に入れて働きたいと思ったこともありますが、保育所の空きがないと言います。Lさん自身も、6ヵ月の乳児を保育所に預けて働くことには抵抗を持っています。

Lさん ああー。家で子育てしてる方が大変。仕事に行きたい(笑)。

筆者 仕事してる方が楽だった？

Lさん 男の人は家にいてるだけでぼけーとしてるだけでいいねえって思うかもしれへんけど、そんな甘いものじゃない。子育てはそんなしんどいもんかと思わへんかったしねえ。もっと楽できるかと思ったけどもう、全然。自分の時間がないし、もう全部子ども中心になるし。もうグロッキー。もうしんどい。毎日毎日。

〈職場の理解〉

Gさんは出産後パン屋でバイトを始めたのですが、子どもが病気の際の欠勤が重なり、1ヵ月で解雇されました。その後保育所の母親3人と同時期に保険外交員を始めます。保険のノルマを達成するのは大変で、仕事を初めて1年4ヵ月で、同時期に始めた母親2人は辞めてしまいました。一方Gさんは、自由な時間が作れ子どもの病気のための欠勤があっても周囲の人が協力してくれるために、仕事を続けることができていると語っていました。

Gさん (前職の)パン屋辞めたんが、なんか(子どもが)4回くらい入院して、ちっちゃい時に。いっぱい休まなあかんくなって、辞めさせられて、で、保険の外交は、こんな(自由な)時間作れるから、(仕事)してからも2回くらい入院したんやけど、営業やから、辞めささらへん、ちゃんと。周りの人も、ちっちゃい子おるの知ってはって、Gを誘わはったから、協力してくれはる。だからそういう時は、仕事いいからついといてあげ、とかそういうのがあったから、続けられて。

*プライバシー保護のため、データを一部改変しています